

---

# とある海賊

やん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある海賊

### 【著者名】

やん

NZ 8959N

### 【あらすじ】

一方通行が目覚めた場所は何とワンピースの世界！－アクセラさんは海賊だらけの世界で一体何をするのか！？

## プロローグ

「…………一体ここはどこだア？」

今まで氣を失っていた一方通行がそう眩きながら起きる

「チッ……」このなところで寝てた記憶はねーぞ?どうなつてやがんだ?」

そう悪態を吐きながらあたりを見渡すと自分と同じようにな氣を失つて倒れている男を見つけた。

倒れている男がよく知る男だと氣付くと突然男に蹴りを入れた

「とつと起きヤがれクソメルヘンが!..」

「ぐあ!..」

蹴られたクソメルヘンは30mは離れているであろう木にぶつかり止まつた。普通の人間ではありえない脚力である。

少しの間、痛みで悶絶していたクソメルヘンだがすっと立ち上がりゆっくりと一方通行に近づいてくる。

「何処のどいつか知らねーが、この学園都市第2位の垣根 帝督様にケンカを売つたんだ。覚悟は出来てんだろつなカスがあ!..」

怒声とともに森が揺れるのが分かる。常人ならば間違いなく逃げ出すような威圧感を出しながら垣根が迫つてくる。

しかし一方通行は常人ではなく逃げ出すようなことはしない。それどころか恐怖の顔色すら見せず寧ろ楽しんでいるように見える。

と、その時一方通行に向かつて何かが飛んでくるのが見えた。

「そいつはただの石じやねえ。俺の能力で炎を纏わせた。焼け死にな」

垣根が言つた通り炎を纏つた石が一方通行に迫る、が、一方通行は避けようとしない。もう石は目の前に来ていた。

垣根は直撃だと確信した。

その瞬間顔の横に弾丸を超えたスピードで何かが横ぎつた。  
「つー？」

垣根は驚いていた。学園都市第一位の自分の攻撃を喰らって立つて居られる人物などそうはない。  
垣根はいつでも攻撃ができるようにして、相手が出てくるのを待つた。

「オイオイオイ、クソメルヘンくんよオ。いきなり攻撃してくるなんてどおいうことだア？愉快なオブジェにでもされたいンですかア？」

挑発的なその声を聞いた瞬間垣根は誰を相手にしているか悟った。  
「なんだ、てめえだつたのかよモヤシくん、細すぎて見えなかつたぜ」

にんまりとした笑顔で垣根が笑う。

「イイ度胸じやねエか垣根くうん、ホントに死にたいらしいな？」  
「ウソウソごめんつてww」

一方通行を怒らせて何の得にもならないと氣付いた垣根は素早く怒りの消火活動を行う。

「まあいい、それよりここが何処だかわかるか？」

怒りを収めた一方通行が垣根に問う。

「ん？何処つて、学園都市じゃ……て、ここ何処だ！？」  
どうやら聞くだけ無駄だったようである。

「お前今まで気付かなかつたのかア？バカにも程があんだろ  
いや、仕方ねえだろ！？いきなりたたき起こされたんだぜ！？」  
「叩いてない、蹴つた」

「どうでもいいわそんな事！！」

今度は垣根がヒートアップしてきた。

「ンな」とはどうでもいい、お前、ここに来る見覚えは？」

心底どうでもいい感じで垣根をスルーした一方通行は垣根に質問した。

「俺にとつてはどうでもよくないんだが……いや、そんなの全然ねえし、ここがどこかも分からねえ」

少し不満そうな垣根だが話が進まないため黙つておく。

「そオカ、俺もそんな感じだ。またアレイスターか何かの仕業だろ。

」アレイスターとは学園理事長で一番偉い人である。

「多分な、こんなことできるのはアイツぐらうだろ」

垣根も一方通行の考えに同意する。

「ここにいても何にもわかんねえ、とりあえず情報収集しに行くか」

垣根が提案する。

「ダリイがそれが得策だな」

一方通行も賛成し、二人は歩きまわることにした。

## 第1話（前書き）

意外と書くの疲れますね。 けどいい感じに達成感が。 まあとりあえず見てくださいww

## 第1話

「おい、町があんぞ」

垣根が発見し、一方通行に知らせる。

「あそこで話でも聞くか」

そういう町に入る二人

「おや、アナタ達も海賊ですか？ようこそいらっしゃいました！」

こはもてなしの町ウイスキー・ピークです！」

町の一人が二人を見つけ話しかけてくる。

「あア？ 海賊？」

妙な単語が気になり一方通行は聞き直す。

「あれ？ 違いました？ ジャあ商人の方ですね！ 大丈夫！ どんなかたでもおもてなししますよ！」

町人は職業を勘違いしたと思つたらしく、今度は二人を商人だと言い出した。

「何言つてンだ？ 僕ら学園都市の…… あアもういいやめんどくせ」誤解を解こうとしたがめんどくさくなつたのか話を切り上げる一方通行

「では宿にご案内いたします。こちらにどうぞ」

何だかめんどくなつた二人は、黙つて町人について行つた。

.....

「着きました。ここが宿です。先に海賊の方がいらっしゃいますがごゆつくりどうぞ」

そういう町人は去つて行つた。

中に入るとさつき町人が言つてたであろう海賊らしき連中が騒いでいた。

「うらあ——もつと肉持つてこ——い！」

「酒追加だ」

「そこで俺は言つてやつたのさ、俺の仲間に手を出すなってね」

「君凄く可愛いね！ここは天国だああ！！！」

あるものは肉を食い続け、あるものは酒飲みの勝負をし、あるものは女性を口説いてる。見るからに愉快そうな連中だった。

「……なんだこのバカっぽい連中は？」

垣根があきれた風に言つ。

「海賊つて言つてたな。この時代にンな奴らいるわけねエ、つまりだ」

一方通行が推測を伝える

「ここは俺たちのいた時代じゃないつてことか」

垣根も答えにたどり着く

「そオいうこつた。まアアイツならこんぐれーできそうだがな」

一方通行は自分自身で納得する。

「何でこんなことしたかつて言われると興味があつたぐらいしか理由つかばねーがな」

垣根が言つ。そう、アレイスターとはたかが興味本位でこんなことができる権力者なのだ。

「あなたがた新しく来られた商人のかたですね？よつこそいらじや・・・ゴホン、マ～～マ～～マ～～いらつしゃいました。私はイガラッポイと申します。どうぞおくつろぎください」

突然変な髪型をした男が話しかけてきた。

「いや、別に俺たちは商売人じゃない。気付いたらここに居たんだ」

垣根が頭を見ながら誤解を解く

「なんと…？旅の途中で記憶を失くされたのですね？なんという不幸だ……せめてこの町で最高の思い出を作つてください！」

誤解は全く解けはせず、イガラッポイは一人を記憶喪失だと思つたららしい

「いや、記憶喪失でもない……つてもういいや、疲れた」

何とか誤解を解こうとしたがまたもやどうでもよくなり記憶喪失に

しておいた。

「ンなことより今は何時代なんだア？」

一方通行は疑問をぶつけた

「今は海賊王ゴーリード・ロジャーが死にロジャーの宝を巡り、様々  
な海賊が居る、大海賊時代です」

イガラッポイの答えに二人は顔を合わせた。

「ロジャーなんて海賊聞いたことねえぞ？」

「もしかしたらここは俗に言うパラレルワールドって奴かもしんね  
ーなア」

二人が考へてゐるとイガラッポイが話しかけてきた。

「お一人は記憶を無くされたのでしょうか？仕方ないことです。さあ、  
辛氣くさい顔しても何も変わりませんよ！？今は宴を楽しみましょ  
う！」

そういうイガラッポイは去つていった。

「考へても今は埒が明かねエンだ、取り敢えずメシ食うかア」

一方通行はそう言いコーヒーを探しに行つた。垣根も

「まあ、腹減つたし考へんのは後にするか」

こつして二人は飯を食べ、床についたのである。

.....

「海賊四名に記憶喪失の一般人二名、今回は楽な仕事ね  
巨体の女がそう言つ

「油断するなミス・マンデー、あの海賊船長は三千万ベリーなんだ  
ぞ？」

イガラッポイが鎮める

「「「さ、三千万ベリーーー？」」

小柄の女と金属バットを持った男が声を揃えて驚く

「そうだ、だから気を引き締めていけ、船長以外は力スだ、特にあ

の一人は何時でも殺れる」

「「「おおっ！！」」

イガラッポイが激を飛ばした。今まさに狩りが始まろうとしている。

## 第2話（前書き）

バイトのせいでなかなか話を書けないんですね。それにそろそろ身体も動かしておかないと部活もあるし…まあ取り敢えず第三話見ちゃってくださいww

## 第2話

ドオオオン！！パンパン！！ウォオオオ！！

騒がしい声が夜中に響く

「うつせーな、何してんだ一体？」

騒音のせいでききてしまった垣根が文句を言つ

「大方さつきの海賊を狩つてんだろよオ、海賊に親切にする町なんて怪しすぎだろ？海賊狩つて賞金首や荷物とかで生活費稼いでんじエねーか？」

横になりながら一方通行が言つ

「なるほど……つて分かつてたんなら何で言わなかつたんだよ！？俺たち襲われたらどうすんだ！？」

垣根が慌てて一方通行に抗議する

「俺たちには賞金も荷物もねエから襲われる理由がねエ、口封じで襲われても負けねエしな」

落ち着いた様子で一方通行が言つ

「まあ、それはそうだけどよ、教えてほしかつたぜ」  
すこし落ち込んだ風の垣根が愚痴を零した  
と、その時、ドッカーン！！

大きな音を立てて男が壁を突き破つてきた。

「くそつ！！化け物かアイツは！？」

恐らく吹き飛ばされてきたであろう男は一人を見つけ

「ガキども起きてたのか？あんな化け物相手できねえ、先にお前ら二人を消してやるぜ！！」

男は二人に突っ込んでいった……

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「その話乗つた」

オレンジの髪の女が嬉しそうに言つ。

「ほ、本当ですか！？」

イガラツポイが倒れながら顔を綻ばす。

「オイ、ナミでめえ何勝手に決めてやがる」

縁の剣士がオレンジの女に言つ。

「あら、この間10万貸したでしょ？その利子よ。それとも何？アンタ口だけの男だったの？」

ナミは剣士に挑発的に言つた。

「くつ…てめえろくな死に方しねえぞ！？」

そういう剣士は走つて行つた。

「あのう、大丈夫なんですか？」

イガラツポイが尋ねる。

「大丈夫よ、ゾロは強いから」

ナミはそう言ひまた笑つた。

12

「なんですか？何なんですかア？ケンカ売つてきたのにこの程度とか拍子抜けすぎるんですけどオ！？」

一方通行が言う、傍にはボロボロになつた男が倒れていた。

「チッ！弱エなア、おイ垣根、親玉潰しに行くぞ」

遊び足りない一方通行は親玉を潰すことに決めたようだ。

外に出てみると大勢の町人が倒れていた。

「どうやらあの海賊達は相当強いみたいだな。俺たちみたいに何か能力があるのかもしんねーな」

垣根が冷静に分析する。その時ドゴオオオオン！！

大きな音がした方をみるとサボテンが崩れていくのが見えた。

「どうやらあそこが戦場らしいな」

垣根がそう言い二人は歩き出した。

「やめろってんだルフィー！！」

ゾロが伸びて攻撃してくる少年に怒鳴る。「うるせえ!! お前を俺が許さねえ!!!

が、伸びる少年ルフィは攻撃をやめない。

ええ、Mr. 5

サンケイス報と日経工業報を出す

垣根たちが現れた。

「なんだあれ? まだ海賊の仲間が居たのか?」

「アイツ誰だ？」

ゾロも誰だか分からず困惑している。

「おし、一方通行。どりあえず海賊以外が敵だ。分かってたな?」

「わかつてンよ、オイ！－そのサングラス！お前がこゝの親玉か

「」

「まあ、そんなとこだ、誰だか知らんが邪魔だ、消えろ」ホジホジ、

ボイ

「…………」

「氣を付ける！その鼻くそは爆発するぞ……」

ゾロが声を上げ注意をする。しかし鼻爆弾はもう目前まで迫つてい

た。

キュイイイン!!

爆発すると思った瞬間、鼻爆弾は一方通行に当たる直前で向きを変え、M・5に戻つて行つた。それも弾丸以上の速さで  
「なつ！？」

どがあああああん!!

鼻爆弾はM・5に直撃し、爆発した。

「くそつ！！どうなつてやがる！？俺の爆弾が返されただと！…？」  
困惑するM・5、すると頭上から声が響いた。

「任せてM・5！私がやるわ！」

爆風で上空に上がつたミス・バレンタインが垣根に狙いを付けた。  
「私の能力はキロキロ実！一キロから一万キロまで体重を増やせる  
わ！喰らいなさい！一万？ブレス！…」

すごい速さで落下してくるミス・バレンタイン

「やつぱり能力者だつたな。身体強化系の「EVE33ゲーリージャ  
ね？まあ俺がやるわ」

垣根は冷静だつた。

「一万？ねえ、どうせならもつとおもへしそうぜ」

途端に垣根の背中から翼が生えた

「なんだアイツ…能力者か！？」

ゾロが呟く、他の皆も驚いているようだ。

「な、何！？か、体が重い！？」

ミス・バレンタインが叫ぶ

「俺の能力でお前の体を通常の10倍の重力が掛かるようにした。  
しかも固定したから体重を戻しても一緒だ」

垣根は満足そうに笑い

「とつと埋まれ、三下が」

そう言いきると静かに座つた。横には大きな穴ができた。

「よくもミス・バレンタインを！」

M・5が一方通行に鼻爆弾を大量に投げつけた。

「もオいいよお前」  
気が付くと一方通行は田の前に居た。彼の右手がMr・5をとひらめる。

「寝てゐる」

そう言い終わった瞬間Mr・5は倒れた。

「なんだア？つまんねエ雑魚どもばつかだな」

一方通行はため息を吐き垣根の元へ向かう。

「つ、強い、あの二人が手も足も出ないなんて……」  
ビビが驚き口に手をあてる。

「お前ら何者なんだ？敵か？」

いつの間にか喧嘩を終えていたゾロが一方通行に剣を向ける。

「何だア？この俺とやろつってのかア？」

剣を向けられたのが気に触つたのか、一方通行は戦闘態勢に入る。

一発触発の状況

「何やつてんのアンタ！？」

いきなり出てきたナミがゾロをしばくことで収めった。

### 第3話（前書き）

やつとルフィたちと行動を共にする直前まで、中々話が進まない  
『そこ等辺は大田に見てください』ww

### 第3話

「なーんだ、早く言えよ。俺はてっきりあの料理に好物がなくてあいつら斬つたんだと思ってたよ」ハツハツハ  
誤解が解けたルフィが笑う。

「テメエと一緒にすんな！！」

理不尽に襲いかかられたゾロが怒りながら文句を言う。

「なんで無理なの？王国の王女なら10億ぐらいい…」

むこうではナミがアラバスターの王女、ビビと話をしていた。ビビやら訳ありのようだ。

「私の国は今、国を倒そうとしている革命軍が居て、その革命軍との戦いで国はボロボロの状態なの」

ビビが国に起きていた状況を話し始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「なるほどなア、つまりそのB・Wのボスが主犯ってわけかア」  
話を聞いていた一方通行が納得をする。

「ええ、そうなの、そしてそのボスの名をクロコダイル」  
「クロコダイル！？それって七武海じゃない！そんなのバラしていいのー？」

ビビのカミングアウトにナミが驚く、そして

「あ、いけない…ばらしっちゃいけないんだった……」  
「いけなかつたようだ。

鳥とラッコに見つかる 顔がバレル 逃げ場無い

「どうすんのよ！？これで完全に逃げ場が無くなつたわよー…？」  
ナミが泣きながら抗議する。

「い、ごめんなさい…」

慌ててビビが謝る。

「なあ？ 一つ聞いていいか？ 七武海って何だ名前から察するに七人つてのは分かるが、そんなに強いのか？」

今一つ状況が読み込めない垣根が質問する。

「七武海を知らないの！ いい？ 七武海は三大勢力の一つで相当強い海賊のことよ！」

少しパニック気味のナミは答える。

「そんな事より俺はお前らの事を聞きてえ、お前らは一体何者なんだ？ 悪魔の実の能力者か？」

先ほどから黙っていたゾロが質問する。

「悪魔の実？ 何だそりや？ 俺たちは学園都市の…… って分からねー

か… まあ簡単に言えば超能力者だ」

ゾロの質問に垣根が分かりやすく答える。

「超能力？？ ああ、あのメガネが使つてた奴か、でもお前らあんな変な催眠使わなかつたぞ？？」

ルフィがウソツクを仲間にしたときに戦つたジャンゴの事を思い出しながら言った。

「催眠術だア？ この俺がそんなどせえもんに頼るようにな見えンのか？」

一方通行はイラついたように言い返す。

「超能力にも色々あんだよ。例えば俺なんかは… 「止めとけ」

垣根が自分の能力の説明をしようとしたところで一方通行が止める。

「何でだよ？」

垣根は不満そうに聞く。

「まだ仲間かもわからねエ奴に手の内見せるなんざアバカか？」  
どうやらまだルフィ達を信用していないらしい一方通行が垣根を諫める。

「なんだよー教えてくれたつていいじゃんかよケチー」

凄く不満そうにルフィ、それを見たナミが

「ねえ？ アナタ達も一緒に行動しない？」

突如提案をした。

「なつ！？」

「勝手に決めんなナ!!-.-」

ルフィとゾロがそれに抗議をする。

「アンタ達はだまつて」

それを制するナミ

「アナタ達もクロコダイルに目を付けられたんだし、一緒に居た方が安全よ。それに記憶喪失でよく海の事知らないんでしょ？何も知らずに海なんて命落とすわよ？」

もつとも理由を言うナミ

(ここつらがいれば少しは命の安全度があがるわ)  
しかし本音自分の生命の安全の為のようだ。

「だつてさ、どうするんだ一方通行？俺はいい提案だと思つんだが」  
自分の意志を述べ、一方通行に結論を促す垣根。  
「俺たちなら大抵の事なら乗り切れる、だが船も何もねエンジヤ話になンねエ、ここは乗るしかねエだろ」

一方通行も賛成を示す。

(それにクロコダイルって奴にも興味があるしな、ビンだけつえエ  
のか試してみるかア)

「好きにしろ」

半ば呆れかけのゾロが言つ。

「えー、俺は反対だ。そんなケチな奴乗せたくない」  
ただ一人納得してないルフィが文句を言つ。

「文句言わない。それに一緒にに居たらまたあの超能力見られるかもしぬれないわよ？」

ナミがルフィをなだめる。

「まじか！？じゃあ乗つていいぞ！」

超能力が見られると聞いてすぐさま意見を翻すルフィ

「なんか、単純な奴だな……」

その姿を見て垣根が呆れている。

「よおーしー目指すはアラバスター！クロコダイルだー！」

こうして一方通行たちは、麦わら海賊団とともにアラバスタを目指すことになった。

## 第4話（前書き）

視線は基本、一方通行の居る所になります。一方通行が何かしてると同時に物語が進んでおり原作のように戦闘になるというパターンですね。まあこれかなるか分からないけどｗｗま、というわけで第4話です。

## 第4話

「と、いう訳でこの船に乗せて貰う事になった。よろしく頼む」  
ウイスキー一ピースを出航し、アラバスタに向かうメリー号の中で垣根が自己紹介をする。

「事情は分かった。俺はこの船のコックをやつてるサンジだ。よろしく頼む」

「まあ、俺がいりやお前らも大丈夫だ。ん？俺か？俺の名はキャプテン・ウソップだ！男の中の男だ！」

金髪のコック、サンジと鼻が高い狙撃王、ウソップも自己紹介をする。

「おい！陸地を発見したぞ！」

海を見渡していたゾロが皆に知らせる。

「ほら見る。あんな奴の言うこと聞かなくてもうやんと島に着いたろ？」

ルフィが満足気にナミに言いつ。

「もういいわよ分かったから」

ナミが呆れながら返す。実は出航前にクロコダイルの秘書、ミス・オールサンデーが”永久指針”を渡してきたのだ。

しかし自分の行く先を勝手に決められたくないルフィはそれを破壊、結果安全に行きたかったナミと喧嘩したのである。

「とりあえず”記録”が溜まるまではまでは動けないわ。それまであの島、”リトルガーデン”で待機ね」

ナミがため息を吐きながら言いつ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ここどこがリトルなんだ？」

ウソップが大きなジャングルを見渡しながら質問する。

「知らない、大体こんな植物も見たことないわ  
ナミが困惑しながら答える。

ギヤアギヤアギヤア！

「つー？ 何ー？」

突然の鳥にナミが驚く。

「大丈夫さナミさん、 ただの鳥だ」

サンジが落ち着いて言つ。

ドッガアアアン！！

何やら噴火のような音が響き渡る。

「危険よ危険！ いい！ ？ 船から降りずじつとしていましょーーー。」

ナミがパニック気味に言つ。

「サンジ、 海賊弁当！」

「ああ？」

突然ルフィが声を上げた。

「何か冒険のにおいがする！ サンジ弁当！」

よくわからない理由で出かけることに決めたルフィ

「ああ、 わかった、 ちょっと待つてろ」

弁当を作りに行くサンジ。

・ · · · ·

「よし！ いくぞ！！」

すかつり冒険気分で出かけるルフィ、その後ろには晴らしに出かけたいというビビと、その巻沿いになつたカルーの姿があつた。

「よし、俺も散歩に行くか」

剣を差し、出かける準備するゾロをサンジが呼び止めた。

「おいちょつと待てゾロ」

「あん？」

「そろそろ食料が尽くるから何か狩つてくれ」

食料調達を頼むサンジ、ゾロは少し考え

「わかつた」

承諾した。

「お前じや到底狩れない奴を狩つてくるわ」

余計なひと言を付け加えて。

「までコラア！！聞きてならねえな。どつちが大きな奴狩るか勝負じゃ！」

「上等のアーリー！」

こうして一人は船を飛び出していつた。

残つたのはナリとカソップ、それに空を眺めている垣根と寝てゐる

トミニカソツブは五ハ一頃を當つた

( (.....販売店へ...) )

まだ馴れていない一人にたじろいでいた。

「が、あの、ムサ隠してないか」とここで駆逐を出したナミだ

強いんでしょ？

少し遠慮気味に話しかける。

質問をされ

「強いも何も、あのサングラスたちが雑魚かつただけだ。そんなに凄くねえよ」

「でも相手は幹部でしょ？凄いわよ」

相手は七武海の幹部、その相手を雑魚と言い切る垣根にナミは驚いていた。

と、その時

メキメキ

ナミが悲鳴を上げる。

ある本にこう書かれている。

「あの住民たちにとつて……まるでこの島は”小さな庭”のよつだ。  
巨人島”リトルガーデン”この島をそう名付けよう」  
そう……ナミ達が見た者、それは”巨人”だった。

## 第5話（前書き）

ちょっと席が止まりく、苦しみながら書き上げました。中々アラバ  
スタまで行けなくすいません。チヨツパーの所に行かないと行けな  
いのでかなり先になるんじやないかと思います。ホントに申し訳な  
い。まあ、取り敢えず、第五話をどうぞ！！

「ガババババ！さあ焼けたぞ！酒の御礼だ、食え！」

「「食べたくありません」」

巨人はブロギーと名乗り、圧倒的な力で恐竜を狩つた後、その肉をナミ達に分け与えていた。

しかしこれから食べられると思つてゐるナミとウソップは食べることを頑なに拒否していた。

「なかなかうめエジヤねエカ

「ほんとだ、結構イケるなこの肉

「「何で馴染んでんだ！！」

そんなことを気にせず肉を食べる垣根達に突つ込みを入れるナミ達。「ンなあことより、この時代に恐竜なんぞア居ることが驚きだ俺は食べながら今食べている肉に疑問を抱く一方通行。

「”偉大なる航路”<sup>グランドライン</sup>では何があつてもおかしくない。文明が発達している国もあればその逆、太古のままの島もある。グランドラインの気候がそれを可能にさせている。ガバババババババ

島の説明をし、大声で笑うブロギー

「あ、あのう、ブロギーさん？」この”記録”<sup>ログ</sup>はどのくらいで溜まるんですか？」

おそるおそる聞くナミ

「一年だ。まあゆつくりしていけ、ガバババババババ

氣楽に笑うブロギーの声がナミにとつて死刑判決に思えた。

「い、一年！？そんなことしてたらビビの国が無くなつちまう…」

ウソップが困つた顔で文句を言つ。

と、そのとき

「おおおおおおんー！」

中央にある山が噴火する。

「おつと、決闘の時間が、さていくか

ブロギーが噴火を確かめ、置いてあつた斧に手をかける。

「決闘？だれと？」

垣根が尋ねる。

「この島にはな、もう一人巨人が居る。俺はそいつと中央の山が噴火することに決闘をしている。かれこれ100年な」

「ひや、百年！？どうしてそんなに…？決闘している理由はなんなの…？」

ブロギーの言葉に驚き、理由を尋ねるナリ。

「決闘し続ける理由は”誇り”喧嘩した理由などは…………とうて志れた！！」ガキン…！

斧と剣がぶつかり合つ。

「互いに故郷が恋しいなドリー！！」

ブロギーがもう一人の巨人に話しかける。

「ああ、だから俺がお前を倒し俺が故郷に帰る、ブロギーよ…！」

もう一人の巨人、ドリーが応える。

そこからは壮絶な戦いだった。

「ぬうあ…！」ブオオン

ドリーが激しく剣を打ち付ければ

「おりや…！」キン…！

ブロギー斧で受け止め

「ふうんならあばあ…！」

ブロギーが叩きつければ

「あ、危ない…！」

「なんのお…！」

ドリーが兜で受け止める。

激闘の最中

「すげえ、これだ、これだよ！俺が目指しているのは…！」

ウソップが興奮して目を輝かしている。

「確かにすげえな」

垣根も同様に己の興奮を隠せない。

「わかるのか垣根！？」

「ああ、あれが戦士つて奴なんだる？」「どうやら一人は気が合ひつとうだ。

「下らねエ」

一方通行はそんな二人をほつとき、空を眺めている。

(誇りだア？そんなもんが何になる？そんなもんで強くなれンのか  
？いくら大層な誇りを持ったからって、力が無けりや何ンもできね  
エ、誇りだけじゃ誰も守れねエンだよ)

巨人たちは最後の力を振り絞っていた。もう武器は使っていない。  
殴り合いである。

「うおおおおお！」

「おりやあああああ！」

「ドンッ！」

お互に決ました。

「7万3千466戦」

「7万3千466引き分け」

「「力」

ズウドオオオオノン！

大きな音を立て、二人の巨人は倒れた。

「ガババババ！ドリーよ！実はさつき人間に酒を貰つた。どうだ！？」

？」

ブロギーが倒れたまま聞く。

「そりゃいい！久しく飲んでねえ！分けてくれゲギャギャギャ！」

ドリーも寝たまま答える。

どうやら巨人たちの決闘は終わつたようだ。

## 第5話（後書き）

戦闘シーンがグダグダでいいません。何分はじめてなもので、出来るだけ上達できるようにするので応援よろしくお願ひします！！

## 第6話（前書き）

疲れながらも書き上げました。またもや意味が分からぬ戦闘シーンですがどうぞ見て貰ってください！

## 第6話

「ガバババババ！ そうか、向こうに居た人間はお前らの仲間か！ 麦わら帽子に女が居つた！」

ブロギーが酒を飲みながら伝える。

「ルフィとビビだわ！」

ナミが顔を明るくさせる。

「なあブロギー！」

ウソップが話しかける。

「俺はいつか、アンタ達エルバフの戦士のように誇り高いなる！！！ そう言いながら目を輝かせる。

「ガババババ！ そうか、俺たちエルバフの戦士にとつて誇りを傷つけずに死ぬことは”名誉ある死”なんだ。名誉ある死は故郷エルバフで語り継がれる。俺たちにとつて誇りとは宝だ！！」

「誇りは宝かあ…………」

「カッコいいなあ

ブロギーのな話を熱心に聞くウソップと垣根どおおおおん！！

またもや山が噴火をする。

「ガババババ！ さて、行くか！」

斧を手にし立ち上がるブロギー

「がんばれブロギー師匠！」

目の前にはドリーが来ていた。

そして……

「うらあああーー！」

「ふんぬうあああーー！」

戦いが始まつた。

しかし様子がおかしい。

「オイ、あの巨人なンかフラついてンぞ

一方通行の言うとおりドリーはふらつこっていた。

「どうしたドリーー動きが鈍いぞーー？」

「……なあに、いつも通りや」

斧を叩きつけながら聞くブロギーだがドリーは平然を装い答える。

「今のうちにルフィーとかを探しに行くわよーーー」

ナミがウソップを引きずる。

しかし一方通行達はついてこない。

「俺らあつちを適当に散歩してるわ」

一方通行達はがナミとは反対方向に歩きだす。

「…分かつたわ、ちゃんと船に戻りなさいよ?」

ナミも納得し歩く。

巨人たちの打ち合いは続く。

と、その時ドリーが足を滑らした。

「つー?」

「もうつたあああーーー」

ザシユーーードオオオンーーー

肉を切る音がし、続けてドリーが倒れる。

「一世紀…永い戦いだつた…ーーー」

ブロギーは泣いていた。どうやら戦いは終わったようだ。

「誰だああーーー」

島にルフィーの声が響く。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「おい、今あのルフィーとか言う奴の声が聞こえなかつたか?何か叫んでるみたいだつたが……」

垣根が一方通行に尋ねる。

「さアな」

興味がないのか気のない返事で答える。

「何か巻き込まれんのかも知らねえ、行つてみないか？」

心配になる垣根。

「チツ、とつとと行くぞ」

二人はナミの言つた方へ向かう。

「……どうなつてんだこりや？」

垣根は思わず咳く。目の前には巨大な口ウのツリーが立つてあり、ナミ、ビビ、ゾロの三人が突き刺さっていた。

近くにはルフィイが黒のマークの上に立つてブツブツ咳き、地面にはウソップとカルーがボロボロで倒れている。

よく見るとM・5、ミス・バレンタイン、それに変な髪形の男M・3と少女ミス・ゴールデンウイークが笑っている。

「一方通行！？よかつた！助けて！このままじゃ口ウにされる！」

二人を見つけ大声で叫ぶナミ。

「げ！？あん時の小僧！？何でココに！？」

二人に気付き、たじろぐM・5

「何だガネ？ただの小僧だガネ？早く消せ」

何も知らないM・3は呑気に命令する。

「……大体分かつた、要するにこいつらを倒せばいいンだろ？」

何となく理解したのか一方通行は笑う。

「フン、貴様らごときクズに何ができると言つんだガネ？」

「今度は油断しねえぞ！」

「ええ、私たちの恐ろしさを分からしてあげるわ」

「……早く休憩したい」

それぞれに意気込むB・W、一人関係ないこと言つたきがしたが…

「垣根、まずはあのロウソクだ」

「おうよ」

うなずく垣根、途端に翼が生える。

「！？能力者か！？」

驚くM'r・3

「ロウソクの周りの空気を燃えやすくした。ウソップ、火は任せるぜ？」

「な、何を言つてるんだガネ！？」

戸惑うM'r・3

「…エルバフの誇りを傷つけたお前らを俺は絶対ゆるさねえ…！」ぐらえ！」

ウソップが火薬玉を放つ。

「フハハハハハ！そんな小さな火種で私の”キャンドルサービス”が壊せないガネ！」

勝ち誇つたように笑うM'r・3、火薬玉がロウに当たる。

ボオオオオ！！

途端に火は大きな炎になりロウを溶かしていく。

「…焼き…鬼！…斬り…！」

突如炎から飛び出したゾロがM'r・5を斬る。

「燃える刀も悪くねえ、…垣根だつたか？礼を言つ」

ゾロは刀を仕舞いながら礼を言つ。

「おのれ…！許さんぞ…！」キャンドルチャンピオン”…！」

M'r・3が全身をロウで包み、一方通行に襲い掛かる。

「おせエンだよ」

しかし、そこにもう一方通行の姿はなかつた。

いつの間にか後ろに居た一方通行はその手でM'r・3のロウに触れる。

たつたそれだけで”キャンドルチャンピオン”は崩れ去る。

「…え？」

「寝てる」

ドサッ！

「テメエがほざいたクズに負けるとは、テメエはクズ以下だな」  
周りを見渡すとミス・バレンタインはナミやビビにやられ、ミス・  
ゴーラデンウイークはカルーに捕まっていた。

「すごい…！あの二人ほんとに強い！」

ビビが驚く、二人が来てたつた数分、その数分で戦いは幕を閉じた。

## 第6話（後書き）

もうすぐ今年も終わりですね。いや、ひょっとしたらこれを見てる方にはもう超したたと言つ方が居るかもしれません。こんな駄文を読んで頂き本当にありがとうございます。来年（今年？）もまたよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8959z/>

---

とある海賊

2011年12月31日19時49分発行